

新聞小説としての岩田豊雄「海軍」——太平洋戦争開戦の記憶

松本和也

I

太平洋戦争開戦から一年が経とうとする頃、特別攻撃隊の九軍神をモチーフとした新聞連載小説、岩田豊雄「海軍」(初出『朝日新聞』昭17・7・1〜12・24〔全76回、休載1回〕、挿絵Ⅱ中村直人)が発表される。同作は、戦時下において多大な影響力をもったにも関わらず、これまでに十分に検討されてこなかった。本稿では、同作を検討対象とする。

岩田豊雄(筆名・獅子文六)は、「あす第二回発表／文筆家仮指定」(『読売新聞』昭23・3・28)において、『政府は二十九日著述家に対する仮指定第二回分約六十名を発表するがその中には岩田豊雄、火野葦平、丹羽文雄氏なども含まれる模様』(一面)と報じられたように、戦後、公職追放の仮指定をうける。結局は、『ユーモリストとしての客観性を持ち該当書も『海軍』の一編でほとんど海軍報道部より半ば強制されて執筆した』(石川、丹羽、岩田氏ら非該当)、『読売新聞』昭23・5・15、2(面)といった理由で処分をうけることはなかったが、並記された石川達三や丹羽文雄による戦時下の文学活動―作品群に比すならば、岩田豊雄の仮指定は罰としては重すぎるように映じる。これは、逆にいえば、該当書となった『海軍』が、一作ながら戦意高揚に多大な影響力をもったと、当局に目されたということもあるだろう。

岩田本人は、獅子文六名義の自伝的小説『娘と私』(『主婦の友』昭28・

1〜昭31・5)において、仮指定に対する異議申立書を書いたことについて、次のように述べている。

異議申立書には、自分は、戦争に協力しなかったということを、書かねばならない。ところが、私は、協力しているのである。私が、『海軍』という小説を書いたのは、国への忠義のために若い生命をさげた一士官に対する、感動からであるが、そんなものを、戦時中に書くということは、戦争に協力してゐるのである。そして、もつと困ることは、その士官に感動したことも、そんな風に戦争協力をしたことも、腹の底で、悪いことをしたと、思っていないのである。⁽¹⁾

公職追放の仮指定にしても、右の岩田の所感にしても、戦後になつたからといって簡単に否定することのできない戦時下の歴史性が、「海軍」に刻印されていることの証左だといえる。問題となつた岩田豊雄「海軍」の執筆経緯についても、『娘と私』に次の言及がある。

ちょうど、その頃に、朝日新聞から、私に、連載小説の話がきていた。新聞連載中は、徴用を免れるという噂で、私は、引き受ける気になつたが、学芸部長の話では、普通の小説を載せると、軍部や情報局がヤカましいから、大東亜戦記のようなものを、書かぬかと

いうことで、私は、思案に余った。戦線へも行かず、戦争の経験もない者に、戦記が書ける道理がなかった。そのうちに、『九軍神』の発表があり、世間が、それで波立つと、新聞では、それを扱う気はないかと、いつてきた。それも、私の手に余る材料なので、辞退をしたが、何度も、口説かれた。／＼「じゃア、ただ一人だけ、選ばしてくれ給え。その人のことを、書けたら、書く。調べた上で、書けそうもなかったら、諦めて貰うことにして……」^③

右に引用した話につづき、岩田は「呉軍港から江田島、鹿児島」へと取材旅行に発つが、それは『九軍神』の中で、一番、親愛を感じるY士官^④が、前作「南の風」(『朝日新聞』昭16・5・22～11・23)の舞台として親しみのあった鹿児島出身ということも大きかったようである。この取材旅行をへて、岩田は『江田島で感じたものと、Y少佐の事跡とを一貫して、私は、自分の海軍員^⑤を、語りたかった』として、「海軍」を書きはじめる。そもそも、岩田は特別攻撃隊の報道を聞いて、『九柱の軍神を、全部書いてみたいほどの感激を受けた』と述べている。

「海軍」の新聞連載に先立つ予告記事「次の朝刊小説」(『朝日新聞』昭17・6・27)には、次の紹介文が掲出された。

真珠湾の猛襲以来無敵皇軍の偉力による不朽の大戦果が新世紀の歴史を創世しつゝある時、本紙はこゝに「海軍」と題する長篇小説を掲げ、戦時下新聞小説の新分野を開拓することにした、作者岩田豊雄氏(筆名獅子文六)はさきに本紙に「南の風」を発表して絶讃を得たが、新たに想を構へた作者は帝国海軍の堅忍不拔の精神と大いなる伝統の力を小説によつて巧に顕示せんと企てたもので、その明快な表現力により、読者は必ずや胸底深く、烈々たる「海軍魂」の

迫るのを感じ得るであらう、(3面)

ここでは、「海軍」の初期設定として、第一に太平洋戦争下の世相を背景に、第二に進行中の現代史(九軍神)というモチーフも含めて『戦時下新聞小説の新分野』と位置づけ、第三に新聞を通じて『海軍魂』を広めることにより『文芸報国』を担うことまでが期待されていた。

また、岩田豊雄本人は、「作者より」(同前)において、次のように意気込みを語っていた。

帝国海軍は巨大なる精神であり、彪大なる組織である。もとよりこれを一篇の小説中に収め得べくもない。たゞ、作者は典型と信ずる一士官の生涯を尋ね、それを通じて、わが海軍の片鱗に触れんと企図するだけである。従つてこの作は作者が従来書いたやうな架空小説ではない。といつて、評伝といふわけでもない。作者は曾てこんな小説を書いたことがなく、また、帝国海軍といふ厳肅なる「事実」を前にして、筆名の衣を脱ぎ棄てる必要を感じた。(3面)

ここで岩田は、一士官を通じて海軍(精神)を書くという、いわば代表化／＼一般化という書法を明確に企図している。しかも、それを『架空小説』とも『評伝』とも異なる、何かしら新しい小説として位置づけ、事実の厳肅さに応じて筆名を排して本名で書く決意をみせている。モチーフも含めて、こうした諸点が『戦時下新聞小説の新分野』たるゆえんでもあるだろう。さらに、「海軍」連載に際しては、次に引く大本営海軍報道部課長・平出大佐「推薦の言葉」(同前)までが付されている。

帝国海軍は一度起つや、大御稜威の下、太平洋、印度洋の海に、空

に、敵を撃破し、有史以来いまだ見ざる大戦果をほし、にしま、にした、これみな将兵一体となつての純忠の精神の現れであり、我が海軍の伝統と隠忍よく猛訓練に堪へ得たがためである、このたび作家岩田豊雄氏が本紙上に小説「海軍」を発表されるととき、誠に時宜を得たる意図にして欣快に堪へず、この作品は潜水艦乗組の青年将校に取材したもの、由であるが、仄聞する如く海軍航空部隊、艦艇部隊を連作され、もつて今日の海軍立体作戦を文芸作品とし、三部作たらしめんことを切に望む（3面）

その後、「海軍」続編が書かれることはなかったが、《時宜を得たる》と評価された「海軍」のモチーフは、海軍の承認・推薦も得ることで、戦時下に有用な報国文学の位置を、連載開始以前から確保する。

このようにして連載がはじまった「海軍」は、《日を追うに従い、私の経験しない好評を博し、四つの映画会社から、契約の申込みがあり、七つの出版社から、出版の依頼がきた》⁽⁸⁾という。同作の単行本は『海軍』（朝日新聞社、昭18）にくわえ、『少国民版 海軍』（利根書房 昭18）も刊行された。ほかに、歌舞伎座、明治座、松竹演劇研究会における演劇、内田元作曲による交響詩、田坂具隆監督による映画とつづき、《小説「海軍」のテーマ》は、《新聞・出版・劇・音楽・映画という各種のメディアを通じて、国民に浸透していき、《昭和十七、八年という時点で、これほど大量に全国に送りこまれ迎えられた作品は、他に例を見ない》⁽⁹⁾ほどのメディア・ミックスが展開されていくこととなった。

こうした岩田豊雄『海軍』については、田中勳儀が先行研究を（Ⅰ）《歴史上の日本海軍を容認したうえで肯定的評価》、（Ⅱ）《戦争批判に立った否定的評価》、（Ⅲ）《戦争批判に立ったうえで肯定的評価》、（Ⅳ）《青春文学としての肯定的評価》の四タイプに整理した上で、《戦時下の

文学に共通する毀譽褒貶はこの作品にもみられるが、「海軍」に積極的な国策協力をみるか否かを問う評価の分かれ目は重要⁽¹⁰⁾だと指摘している。ただし、こうした評価は戦後の視座を自明の前提としており、逆にいえば、作品の歴史性を十分に考慮したものではない。そこで本稿では、発表当時の意味作用／受容について、連載期間の新聞報道を視野に収めつつ、『海軍』を同時代の視座から分析・考察していく。⁽¹¹⁾

Ⅱ

岩田豊雄「海軍」は、昭和一六年一二月八日、特殊潜航艇で真珠湾攻撃に参加した後、九軍神と崇められた一人、横山正治をモデルとし、その偉業達成までを辿った小説である。太平洋戦争開戦が昭和一六年一月八日、特別攻撃隊の内実が発表されたのが昭和一七年三月六日、それから数ヶ月のうちに「海軍」連載が始まる。この間、「海軍」にも「九軍神が全国に与へた感動の波は、津波にもひとしかつた」、「新聞雑誌記者は、先きを争つてその生地を訪ね、名ある歌人、俳人、詩人、漢詩人が、連日、頌唱を発表した」（昭17・12・19、4面）と記された通り、新聞報道、雑誌記事にくわえ、朝日新聞社編『特別攻撃隊九軍神正伝』（朝日新聞社、昭17）などによって九軍神は広く報じられていく。

したがって、《小説「海軍」には、記録文学としての要素と青春文学としての要素があるが、このうちの記録的な部分は、すでに国民に周知のことから》⁽¹²⁾であり、《当時の人々はこの小説によって「九軍神」への感動を反芻した⁽¹³⁾》のだという。

以下、「海軍」に刻まれた同時代の歴史的表徴を確認していこう。岩田豊雄「海軍」は、主人公Ⅱ谷真人の誕生が、次のように語られて幕が開く。

ヴェルサイユ条約が成立したのが、六月二十八日、巴里の市民は、ありとあらゆる窓から、ありとあらゆる紙片を裂いて、コンフェツチの雪を降らせた。勝利の歓びよりも、平和の到来に感銘まつたらしいのだが、それから、約五月目の大正八年十一月十八日に、鹿児島市下荒田町の精米商谷真吉方で、一人の男の子が生れた。(昭17・7・1、4面)

このように、アジア・太平洋戦争も含めて、国内外の大文字の出来事を点描しつつ、原則として、真人の生涯を時系列に即して追っていくのが「海軍」の基本構造である。大正天皇の崩御、上海事変、満州国建設、五・一五事件、国連脱退、二・二六事件、盧溝橋事件、ノモンハン事件、近衛第三次内閣の辞職・東条内閣の成立、日米交渉の決裂、そして真珠湾攻撃と特別攻撃隊に関する海軍省発表、九軍神の合同海軍葬といった歴史の推移を背景に、同級生の牟田口隆夫に触発された海軍志願の芽生えから、海軍兵学校へ進学、海軍での訓練を経て特別攻撃隊の一員として真珠湾に散っていく真人の生涯が、作品の主線をなしていく。

こうした主線を立体化しつつ、機密も含めた真人の出撃以後の空白を補う役割を担うのが、副主人公たる真人の同郷の親友・牟田口隆夫と、その妹にして真人を慕うエダである。この人物配置については、柘植光彦に《副主人公の熱意と絶望、そして画家としての奮起も人間的である》、《その妹の慕情もさわやかで、むしろこの作品は、三人を軸とした青春小説として成功している》⁽¹⁾といった評価がある。実際、この二人は、真人の幼少期から海軍合同葬まで、つまりは作品構造でいえば冒頭部と結末部に配置され、真人の生涯を縁取る。こうした設定は、軍事的な機密情報回避し、真人の死後も物語を進めることを可能にしている。

「章構成でいえば、「男の子」、「春」、「少年志を立つ」、「軍人組」、「谷四

号生徒」、「どん亀」、「兵学校論」、「風と波」、「真人の日記」、「広い海へ」、「鱧」までは、語り手が真人によりそいながら展開していくが、後半の「修羅」、「エダに書く手紙」、「海軍画家」、「桜と錨」、「血と涙の歴史」、「宿望のこと」、「霹靂」、「近頃の若い者」になると、語り手は牟田口隆夫によりそい、その立場から折々真人のことを語っていくスタイルに変更される。このことは、逆にいえば「海軍」における語り手「筆者」の支配力の大きさを、問わず語り示している。それはたとえば、冒頭近くの「この事の序に、真人を生んだ下荒田といふところの地誌を、語つて置きたい。普通の小説なら、かういふことはせぬのだが、今度の場合は、その必要があるのである」(昭17・7・5、4面)、あるいは、次のような一節にも顕著にみとれる。

谷真人が留守の間に、筆者は、海軍兵学校について、短かい感想と論議を行つてみたいのである。筆者のプランを白状すれば、真人の江田島生活を描くことによつて、兵学校の全貌を示すといふ目論見だつたが、どうして、そんなことは、拙腕の遠く及ばざるを知つたのである。それほど、兵学校の肉体は形大且つ複雑であり、内包するところ極めて深く、また特異なのである。小説の形式を以てすれば、百回を与へられて未だ足りさうもなく、それではキリのない話になるので、かゝる手ツ取り速い方法を、とらざるをえないのである。(昭17・8・30、4面)

このように戦略的な「海軍」の語り手「筆者」は、真人―海軍精神というモチーフを讀者によりよく届けるために顕在化し、受容の方向づけに関わっていく。「海軍」に書かれた開戦の朝も、次に引く。

そして、十二月八日の朝がきたのである。朝まだきの霹靂は、日本全国民を覚醒した。漠々たる濛気は、悉く吹き払はれ、眈を決した人々に、神々しい初冬の碧落が映つた。風なく、陽麗かな、あの日の大空を、ああ、誰が忘れ得よう。(昭17・12・8、8面)

こうして昭和一七年一二月八日に掲載された「海軍」には、右に引用した、ちょうど一年前の太平洋戦争開戦日の出来事が書かれる。九軍神をモチーフとした「海軍」は、それゆえに結末まで含めて大筋は、読者には既知であり、ことに至るまでの過程がいかに説得的に書かれるかが急所となる作品であり、そこに読者を効果的に導くために、未来のことで予示的に語る《先説法》(G・ジュネット)がしばしば用いられていく。たとえば、「この産土神に対する郷民の尊崇はまことに篤く、真人が、後年海軍軍人となつてからも、帰省の度に、社前に額くことを忘れなかつた」(昭17・7・3、4面)、「彼は、小学校からさうであつた如く、やがて一人前の男になつてからも、大きなヨイコドモだつた。感心な青年といへても、偉大だとか、英邁だとかいふ風は、微塵もなかつた。少くとも、後年、大事を執行するまでは、誰の眼にもさう映つた——」(昭17・8・9、4面)など、幼少期の真人を語る語り手「筆者」は、軍人となつて大事を執行する未来を予示しながら語っていく。真人がはじめて真珠湾を訪れ、「(いつの日にか、武装して、再びこの地を訪れる時があらう)」と考えた際の、次の場面は特異かつ重要である。

ふと彼の眼は、波の中に、黒い幻を見た。また、鱯が泳いでるのである。「略」真人は、その数を眼で追ふと、意地悪く、水底へ姿を消すのもゐたが、九ツか十ほどの群だつた。彼は、何事も忘れたやうに、鱯の群を眺めた。すると彼の軀が、スル／＼と水中へ曳き込

まれるやうな気がした。あたりが、エメラルド色の世界になつた、青白い海底の砂が見えた。彼は鱯になつたのである。(昭17・10・4、4面)

ほかならぬ真珠湾で真人が予示的な「幻」を見る場面だが、引用につづき「鱯が、一列になつて、音もなく、真珠湾の方へ進んで行く」さまは、容易に特別攻撃隊を想起させつつ、水中での視界は特殊潜航艇に乗った真人のそれに重なるようである。しかも、その鱯の数が「九ツか十ほど」であることは、一〇人の特別攻撃隊員のうち、九名が戦死して九軍神となつただけでなく、残りの一名が米軍の捕虜となつた経緯を、臙化させながらも書きこんだ表現にみえる。

こうした語り手「筆者」の戦略は、「海軍」の掲載紙面・掲載時期とも密接に連動していく。そもそも戦時下に九軍神をモチーフとした「海軍」は、日中戦争開戦日(七月七日)、さらには太平洋戦争開戦日(一二月八日)をまたぐようにして連載されていく小説である。

したがって、「海軍」連載中の新聞、同一面には、小説の内容と関係する記事が掲出され、新聞読者の読書行為を通じて、「海軍」の現実性は高められていくことになる。日中戦争開戦日に前後しては、平貞蔵「事変記念日に寄せて 支那の動的把握(一)」「(三)」(昭17・7・7・9)、日比野士朗「七月七日を迎ふ(上・中・下)」(昭17・7・7・9)という二つの記事が、「海軍」と同一面に掲載される。《事変の勃発した年の北支は毎日随分暑かつた》、《あれから正に五年たつた》という平貞蔵は「支那の動的把握(二) 新機運の台頭」(昭17・7・7)で、《前線で活躍される将兵の労苦を偲びつゝ、事変をふりかへつてみたい》(4面)と開戦日を振り返ると同時に、読者にも開戦日の想起を喚起していく。日比野士朗は「七月七日を迎ふ(下)」(昭17・7・9)で、《昨年の一二月八日

以来、私たちの気持は実にはつきりした《ことにふれ、《宣戦の大詔を拝した時ほど、私たちは言ひ知れぬ感動にをのいたことはあるまい》(4面)と述べ、《私たち》という一人称複数の代名詞を用いて、読者とともに一年前の一月八日の感動を反芻していく。

さらに、太平洋戦争開戦日を前に、シリーズ記事「めぐる感激十二月八日」(『朝日新聞』昭17・11・17)12・1(11回)が、やはり「海軍」と同一面に掲載される。志田延義「反省と前進へ」(昭17・11・17)では、《いま一周年を迎へんとするに当り、皇国臣民たる己に省み、この一年間、わが生活、営為に如何に大詔奉戴の誠を効し、工夫、努力を重ねて来たかを顧みたい》(4面)と、読者に開戦日の回顧を促していく。《それから一年。たつた一年》とこの一年間を振り返る高村光太郎は「人意以上のもの」(昭17・11・25)で、《その間に大東亜から米英蘭を駆逐した皇国の威力は古今東西に比を見ない》(4面)として、戦果を言祝ぐ。「海軍」の内容に直結するのは芳賀檀「新たな感動」(昭17・11・26)で、《一年かへり来る日、戦ひのなほ厳しく、遙かなのを思ひ、身を捧げた緋威の若武者らの功を思ひ、感動を新にする》(4面)と述べて、戦地で戦ってきた若き兵士へと思いを馳せていく。

してみれば、岩田豊雄「海軍」とは、進行中の太平洋戦争に関わって、九軍神の一人をモチーフとしつつ、軍神としてではなく個人として谷真人を書き、そのことを通じて《帝国海軍の精神》を表現し、さらには二月八日以来の感動／戦果を読者に想起させ、開戦日以降の日々への再評価を促していく新聞小説だったのだ。別言すれば、小説として個人の成長―人生を書くと同時に、太平洋戦争の局面をつぶさに書き、そのことを通じて戦意高揚にも貢献していく。もちろん、こうした表現―意味作用―受容は、初出の新聞―読者を離れても、メディア・ミックス展開によって広がっていくが、その起源―核には昭和十七年下半期に新聞

連載された岩田豊雄「海軍」が位置している。この総体こそが、功／罪あわせもつ戦時下文学作品「海軍」の歴史性である。次節では、岩田豊雄「海軍」の同時代における読まれ方や評価について検討していく。

III

「海軍」の新聞連載半ば、新聞連載予告に名前を並べた二人による、平出英夫・岩田豊雄「対談 海軍」(『文芸』昭17・9)が発表される。ここの対話の意味を把握するために、「海軍」の作者⇨岩田豊雄が、筆名⇨獅子文六として、これまで新聞を主舞台とした人気大衆作家であったことを確認しておこう¹⁵⁾。また、平出の評価軸もあらかじめ確認しておけば、《戦つてゐる間は文芸だらうが、小説だらうが、みんな総動員で、その意味での小説は戦ふ文芸だ》、《事実に近く言ひ表せば言ひ表す程戦ふ文芸になり、あまりひどく脚色し尽すと、戦ふ文芸にならない》(49頁)という発言からわかるように、平出は総力戦体制下において、文芸もまた戦争の一部としてその完遂に貢献すべきで、そのためにはなるべく事実に即した表現こそが重要だと考えていたようだ。こうした前提をふまえ、次の平出発言をみてみよう。

平出 娛しむ文芸が万人の頭にあるから、その点があなた(岩田)としては非常にむつかしいところだな。あなたがもつてをられる読者に一つの層があるでせう。その読者層があなたに期待してゐるのは戦ふ文芸ではなくして、娛しむ文芸であつたと思ふのですよ。全部が全部ではないでせうがね。(49頁)

平出(略)今までの、複雑な心理を描いた小説の多くは、日本人が一億居るとして、その一億分ノ十か百位の特殊な場合しか表現して

ゐないやうに思ふのです。一億の日本国民の典型といふものは感じられない。ところが、「海軍」を読んでみると、これは一億人の小説だといふ感じがします。(50頁)

ここで平出は、《娛しむ文芸》(の書き手)としての獅子文六から、《戦ふ文芸》(の書き手)としての岩田豊雄への転身、小説表現上の変化を高く評価している。しかも、平出はそのことで、「海軍」が広い読者層に届く小説になったと判じている。もとより、獅子文六は人気作家だったが、「海軍」は従来の読者層をこえて《一億》全国民に届き得る小説になっているというのだ。しかも、それによって「海軍」は、俗化したわけでもなければ、芸術性を欠いたわけでもない。そうした評価は、次に引く、丹羽文雄・火野葦平「決戦と文学」(《文芸》昭18・2)において、純文学サイドの評価軸から丹羽文雄が示すものでもある。

編輯者 大海戦に参加してお帰りになつてあれ「海軍」を読んでの感想はどうですか？／丹羽 あれは非常に感心したな。／火野 僕は読まなかつた。新聞が飛び飛びに来るものだから。／丹羽 作者は書くのが辛かつたらうけれど岩田氏といふ人は、純文芸作家としても一流だな。(114頁)

右の引用冒頭部の編輯者発言の含みは、ソロモン海戦に従軍し、海軍報道班員として「ツラギ海峡・壮烈の夜襲戦」(《朝日新聞》昭17・9・1)を、小説家として「海戦」(《中央公論》昭17・11)を発表して高い評価を得た、戦争を体験した文学者の丹羽文雄にとって、ということである。⁽¹⁶⁾丹羽の発言は、岩田が一流の大衆作家であることを認めた上で、「海軍」にみられた岩田の執筆に関わる態度を高く評価したものである。

そうした同時代における高い評価は、「海軍」の朝日賞受賞としても顕れる。「朝日賞に輝く人々とその業績」(《朝日新聞》昭18・1・14)では、「文芸作品に新生面 岩田氏の「海軍」という見出しで、「海軍」の受賞が報じられ、その理由が次のように示されていた。

彼の九軍神の遺徳を偲んで創作されたもので、文芸作品のもつ力を十二分に發揮して積極的に戦争文化建設への役割を果たしたものである。文芸作品としても本年度の優秀作と評されるのみならず宣伝性においては帝国海軍の伝統精神をよく社会各階級に浸透させ、銃後の士気昂揚に資した点は絶大なものと認められる(4面)

ここでは、文学作品としての芸術性と報国文学としての宣伝性を、二つながらに兼ね備えた作品として「海軍」が評価され、同時にその書き手・岩田豊雄の《戦争文化建設への役割》も顕揚される。

こうした九軍神の《遺徳を偲》ぶ岩田の真摯な姿勢は、板垣直子『現代日本の戦争文学』(六興商会出版部、昭18)でも高く評価される。板垣は連載終了直後の「海軍」について、《少くとも毎朝新聞紙上でうけた印象からすると、対象が生々しい割には、落付いた調子のもの》だと評し、さらに作品の仕掛けにも論及していく。「海軍」に関する《物足りなさ》は、主としてその「作りもの然とした」不自然さに現はれてゐる」という板垣は、《兵学校の試験に落ちたので海軍画家となり、戦争画を描いて海軍大臣賞をうけた画家を主人公の親友にして置いて、すべて彼を通して主人公の海軍将校であり潜水艦乗りである環境及び最後の海軍合同葬までを紹介することになつてゐる》牟田口隆夫の設定を難じると同時に、その妹のエダについては《だし方や引込め方、彼女と主人公との間に仮定される淡い関係に對する暗示は、まことに老練な技巧を示すもの》だ

と評価する。さらに板垣は、「海軍」に《終始一貫して保たれた芸術的な感情、気品》(325頁)を見出し、それを可能たらしめた《原因》を《作者自身が現実 に於いて、九軍神の忠君愛国の精神と武勲に輝く行為に對し、衷心から感動したこと》(325～326頁)にみては、《その感動は、作品に向ふ作者の全態度を決定し》、《かくて、好ましい作品感情ができた》のだと評価する。その上で、板垣は次の総評を示す。

要するに「海軍」のやうな企画は、作者に消化されきらずに浮いたものとなる恐れが充分にあるものである。それがさうならなかつた。そして、それは一軍神の生涯を描くとともに、日本の海軍といふものについても報道する意味がこもつてゐる。厳密に時局を背景として生れた複雑な意図のこもつた報道文学の一種である。(326頁)

以上の同時代評から検討する限り、発表当時の岩田豊雄「海軍」とは、九軍神をモチーフとした小説として、海軍にも純文学作家にも高く評価され、また、『朝日新聞』読者層を中心に、広汎な国民に支持されたことは間違いない。しかも、その内実は、『戦ふ文芸』として戦意高揚に寄与する面と、登場人物から読みとられるヒューマニズムが打ちだされる面とを兼ね備えた、両義的なものだったので。

最後に、そうした「海軍」の特徴を集約した、戦略的な場面―構成を讀解して、まとめにかえたい。二中時代、海軍志願に目覚めつつあった真人の内面が、次のようにして《先説法》で書かれる。

「断じて行へば、鬼神も亦避く……」／これが、菊池少佐の口癖だつた。信条だつた。真人の頭に、その言葉が、深く食ひ込んで、十年

後に至つても、消えなかつた。(昭17・7・17、4面)

右の一節は、全一九章構成の「海軍」中、二つめの章「春」における、いわゆる伏線である。その回収は最終一九章、すでに死んだ真人を隆夫が想像する次の場面によって果たされる。

断じて行へば鬼神も之を避く／海軍中尉 谷真人／隆夫は、新聞に出てる親友の墨痕を、いつまでも、睜めてゐた。／(この文句を、二中時代から、真人は愛誦してゐたのだ。菊池配属将校が、口癖にいつてゐた言葉だつた……)／霜降りの小倉服を着た、真人の中学生姿が、アリ／と、眼前に見えた。天保山浜で、歯を食ひ縛りながら、甲羅干しをしてる姿も、見えた。いや、それより前に、八幡小学校の鉄棒に、必死になつて獅噛みついてる姿も、睨に浮んできた。小さな魂が、こんなにも大きく、生きとほす――(昭17・12・17、4面)

こうして、「海軍」後半から表舞台に姿をあらわさなくなつていく真人にかわり、隆夫を参照点(視点人物)として真人―「海軍」を讀んできた読者は、右の場面で改めて「海軍」に書かれた真人の人生―それほとりもおさずモデル・横山正治の人生でもある―を、感謝とともに反芻し、作中の隆夫と感動を共有することになるだろう。こうした「海軍」であれば、『国策協力文学と一線を画しているのは、真人を超人的英雄として描かず、むしろ暖かい人間味を持たせている点に負うところが大きい』という評価は一面的にすぎ、同時代にはこうした面が同時に、小説ならではの戦意高揚―戦争協力でもあつたことは疑いない。

総じて岩田豊雄「海軍」とは、岩田自ら《大東亜戦争といふものが

つたら、僕は、恐らく『海軍』といふ小説を書くこともなかった⁽⁹⁾と性格づけたように、前線と銃後とをよく媒介し、戦時下にあつて、その内容・表現ゆえに国民文学として大きな影響力をもった小説であつた。

注

- (1) 獅子文六『娘と私』（『獅子文六全集 第六巻』朝日新聞社、昭43）、470頁。
- (2) 河盛好蔵は「解説」（『現代国民文学全集1巻 獅子文六集』角川書店、昭32）において、『現在どのようにな太平洋戦争をきびしく批判する人でも、ハワイとマレー沖の海軍の戦果をきいたとき、更に、真珠湾の攻撃には特殊潜航艇の殊勲があつたことを知ったときには、心から感激した筈である』、『でなければ、日本人とは云えないと私は信じている』（44頁）と述べているが、こうした考え方・立場は、『海軍』が擁した同時代性とも重なるはずである。
- (3) 注(1)に同じ、383頁。
- (4) 注(1)に同じ、383頁。
- (5) 注(1)に同じ、387頁。
- (6) 岩田豊雄「小説『海軍』を書いた動機」（『海軍随筆』新潮社、昭18、243頁）。
- (7) 注(6)・岩田論では、『軍神の生ひ立ちを書くうちに、その郷土を書くことによつて、海軍の歴史を書き込むことができる』、『帝國海軍の精神については、軍神の海軍兵学校時代を書くことによつて、果されると思つた』（244頁）と述べており、企図は明確であつた。
- (8) 注(1)に同じ、389頁。
- (9) 柘植光彦「岩田豊雄『海軍』（『解釈と鑑賞』昭48・8）、108頁。あわせて、田中勳儀「岩田豊雄『海軍』の展開」（『同志社国文学』

平16・11）も参照。

- (10) 田中勳儀「岩田豊雄『海軍』論」（『文林』昭57・12）、2頁。
 - (11) 注(10)・田中論文では、『小説『海軍』は、海戦当時の一般民衆の意識レベルを過不足なく反映した作品であり、戦時下という特殊な状況において大勢に流されやすい人間の意識構造をみつめるうえでも興味深い作品である』（23頁）という作品理解が示されている。
 - (12) 注(9)・柘植論文に同じ、108頁。
 - (13) 大原康男「帝國陸海軍の光と影」（展転社、平17）、250頁。
 - (14) 注(9)・柘植論文に同じ、109頁。
 - (15) 牧村健一郎『獅子文六の二つの昭和』（朝日選書、平21）参照。
 - (16) 一例として、南川潤は「小説」（『若草』昭17・12）において、『海軍報道班員としてその身に生々しき負傷を負ひながらこの歴史的大海戦を体験した』ことを以て、『海戦』以下の丹羽の一連の著作を『眼をみはるべき偉業』（25頁）だと絶賛している。
 - (17) 同時代読者である尾崎秀樹は「一九四二年夏のこと」（『獅子文六全集 付録月報No.16』朝日新聞社、昭44）において、『主人公谷真人の青春をとおして、日本海軍の伝統的精神を描きながら、散華した九軍神を神格化しがちな当時の風潮からはむしろ逆な人間的な味をしめした』もの（4頁）といった、ヒューマニズムを重んじた読後感を示している。
 - (18) 注(10)に同じ、12頁。
 - (19) 注(6)に同じ、243頁。
- ※ 「海軍」の本文引用は初出による。なお、初出作品を示す場合には「」を用い、単行本および一般的な用法に際しては『』を用いた。
- ※ 本研究はJSPS科研費「P20K00346」の助成を受けたものです。
- （まづもとかつや 神奈川大学教授、日本学研究所特別研究員）